

# アバール語の「～ぐらい」などを表す -ŋanについて\*

山田 久 就

## 1. はじめに

「AはBぐらい大きい」の「～ぐらい」を表すのにアバール語では助詞 -ŋanが使われる。助詞-ŋanはこれ以外の使われ方もする。

アバール語は主にロシア連邦ダゲスタン共和国で話されていて、ナフ・ダゲスタン諸語（あるいは語族）に属する。

二つの名詞を比較して類似を表すのに、アバール語では、-ŋadinと-ŋanを使う。-ŋadinは、「AはBのように大きい」で「のように」を表すのに使われ、-ŋanは「AはBぐらい大きい」で「ぐらい」を表すのに使われる。-ŋadinを

\* 標準アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、ラテン文字へ次のような転写を行って、標準アバール語を表記している。a=a, б=b, в=w, г=g, гь=ġ, гь=h, гI=ŋ, д=d, е=e, ж=ž, з=z, и=i, й=j, к=k, къ=q', къ=ŋ', кI=k', л=l, ль=ľ, м=m, н=n, о=o, п=p, р=r, с=s, т=t, тI=t', у=u, ф=f, х=x, хь=q, хь=ç, xI=h, ц=c, цI=c', ч=č, чI=č', ш=š, ш=šš, ъ=è, ю=ju, я=ja, ъ='。アバール語で使われているキリル文字のラテン文字への転写には標準的な方法が確立しておらず、ここでの転写法は筆者独自のものであることをお断りしておく。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABS: absolutive(絶対格); CAUS: causative(使役); COND: conditional(条件法); DAT: dative(与格); EMP: emphatic particle(強調); ERG: ergative(能格); F: feminine(女性); GEN: genitive(属格); GNL: general(一般時制); INF: infinitive(不定形); LAT: lative(向格); LOC: locative(位格); M: masculine(男性); NEG: negative(否定); NH: non-human(非人間); PL: plural(複数); PRS: present(現在時制); PC: perfect converb(完了副動詞形); PRT: participle(形容詞的分詞形); PST: past(過去時制); Q: question marker(疑問標識); QUO: quotation marker(引用標識)。アバール語の名詞の位格、向格はそれぞれ5系列から成っていて、位格、向格の後ろの数字は、その系列を表す。アバール語では、「ここ」を意味する副詞、「～の中」を意味する後置詞など、場所を表す副詞や後置詞も位格、向格等の区別を持っている。

使うと、Bが大きいこととAが大きいことを伝えることができるが、-ʒanを使うと、Bが大きいこととAが大きいことに加え、Aの大きさがBの大きさとだいたい同じであることを伝えることができる。したがって、-ʒanは二つの名詞（あるいは、他の品詞）を比較して、なんらかの基準においてその程度がほぼ同等であることを表すのに使われる。

筆者の-ʒanへの関心が、比較の中での-ʒanの使われ方から始まったので、-ʒanの比較に関する使われ方から始めたが、-ʒanには、別の用法がいくつかある。本稿の目的は、-ʒanにどのような使われ方があるのかを概略的に示すことにある。

品詞分類において、名詞を修飾する形式は、一般的に、形容詞と呼ばれ、動詞、形容詞を修飾する形式は、一般的に、副詞と呼ばれる。副詞は別の副詞を修飾することもある。-ʒanは副詞的に使われることがもとの用法であると思われるが、「～ぐらいの」という意味などで名詞を修飾することもある。名詞を修飾する場合には、-ʒanに-a-AMが後続した-ʒana-AMや-ʒanに-ase-AMが後続した-ʒan-ase-AMと共存する<sup>1</sup>。-ʒana-AMや-ʒan-ase-AMは名詞を修飾するために使われるだけで、副詞的には使われない。

## 2. 比較

助詞-ʒanが程度を比較するために使われることは、Bokarev (1949: 164), Sulejmanova (1980: 157), Madieva (1981: 141), 他で述べられている。助詞-ʒanが(1)では形容詞を、(2)では動詞を修飾している。

- (1) Raç-ʒan                      qaħa-b      humer-alda  
 ミルク.ABS-ぐらい      白い-NH      顔-LOC1  
 「ミルクぐらい白い顔」[MP-K, 111]

<sup>1</sup> -AMは一致標識の略号であるが、人間の男性の単数、人間の女性の単数、人間以外の単数、全ての名詞の複数の4区分となる。

- (2) bac'ida-ʕan      hinqi      ʔa-la-r-e-w      Xalil  
 狼.LOC1-ぐらい   恐れ.ABS   知る-GNL-NEG-PRT-M   Khalil.ABS  
 「狼ぐらい恐れを知らないKhalil」 [ShG-K, 309]

(1), (2)の両方で、助詞-ʕanの前に名詞が来ているが、(1)では、名詞が絶対格形をしていて、(2)では、名詞が第一位格形をしている<sup>2</sup>。これは、-ʕanの前の名詞が比較される名詞と同じ格で現れるからである。(1), (2)ともに、比較されている名詞が明示的に表れていないが<sup>3</sup>、「Aが白い」のAはアバール語では絶対格で現れるし、「AがBを知っている」のAは第一位格で現れる。

名詞の他に、時間や場所などを表す副詞、後置詞が比較される側に来て、-ʕanの前に現れることもある。比較する側には、時間や場所などを表す副詞、後置詞や位格などの名詞が現れる。時間を表す副詞、後置詞としてはhanže「今」、žaq'a「今日」、radal「朝に」など、場所を表す副詞では、hani-AM「ここで」、žani-AM「中で」、rik'kada「遠くで」などが使われている。

### 3. 個数詞+ -ʕan

アバール語では、個数詞は名詞の前に現れる。名詞の前にある個数詞に-ʕanがつくと、「～ぐらいの」を意味する (Sulejmanova 1980: 119, Madieva 1981: 97, 他)<sup>3</sup>。(3)がその例である。

- (3) Anc'go-ʕan      son-af  
 10-ぐらい      年-ERG  
 「10年ぐらい」 [DJu-A, 451]

<sup>2</sup> 標準アバール語の全ての名詞、代名詞は、絶対格・能格型で変化する。

<sup>3</sup> Bokarev (1949: 164) には、数詞+ -ʕanase-AMの例は出ているが<sup>3</sup>、数詞+ -ʕanには言及がない。

述べておくべきと思われるところでは、私が調べたテキストには、co「1」に-ŝanがついている例はない。また、ĉan「何人の、何個の」に-ŝanがついている例も見つからない。

文献で言及されていることはないと思われるが、個数詞+-ŝanは、名詞の前に現れず、副詞的に使われ、「AはBの～倍ぐらい大きい」のような比較で使われることがある。(4)がその例である。

- (4) Heb            nuŝoda            nusgo-ŝan    dida            ĥik'    la-la,  
       それ.ABS    あなた達.LOC1    100-ぐらい    私.LOC1    よく    知る-GNL  
       「それをあなた達の100倍ぐらい私はよく知っている」[HH1-R, 60]

(4)では、「私」が個数詞+-ŝanの前にある「あなた達」と比較されていて、比較されている「あなた達」は「私」と同じ第一絶対格になっている。

#### 4. 比較での動詞+-ŝan

この節から9節まで、動詞に-ŝanがついている形式について述べていくが、最初は、比較での使われ方から始める。

名詞と名詞を比較する場合、たとえば、「AはBぐらい速く走った。」というのと、「AはBが走るぐらい速く走った。」あるいは、「AはBが走ったぐらい速く走った。」ことを表し、時制や極性などは含まれたり、含まれなかったりするが、比較される側と比較する側で動詞は共通している。

比較される側と比較する側で動詞が同じであるか違うかは関係なしに、日本語では、「AはBが走るぐらい速く走った。」のように、比較される側に動詞を含むことができ、その場合は、「走るぐらい」のように、「ぐらい」の前に動詞の定形が来る。アバル語でも、比較される側に動詞を含むことができ、-ŝanの前に動詞の形容詞的分詞形が置かれる(Samedov, 2012: 383)。(5)、(6)がその例であるが、(5)では、-ŝanの前の動詞が過去時制形であるが、(6)で

は、一般時制形である。

- (5) Mun            ʔurd-ara-w-ŋan,                    dun-gi            ʔurd-ila  
 あなた.ABS 踊る-PST.PRT-M-ぐらい 私.ABS-も 踊る-FUT  
 「あなたが踊ったぐらい私も踊る」(Samedov 2012: 383の例)
- (6) Č'agoja-w    či-jas    he-l    raŋabi    ab-una    wičaruqan-as  
 生きている-M 人-ERG その-PL 言葉.PL.ABS 言う-PST 店員-ERG  
 tukada    konfet-al    heč'-ilan    ab-ul-e-b-ŋan                    bihago.  
 店.LOC1 飴-PL.ABS ない.PRS-QUO 言う-GNL-PRT-NH-ぐらい 簡単に  
 「店員が店に飴はないと言うぐらい簡単に生きている人がその言葉を  
 言った」[MP-K, 83]

次の(7)では、「私が良い人間である」における性格の良さの程度を聞き手が言っている程度と話し手が思っている程度を比較しているので、こうした例も動詞+ŋanが比較として使われていると考えられる。

- (7) Duca            b-ic-un-e-w-ŋan    lik'a-w    či-gi  
 あなた.ERG NH-言う-GNL-PRT-NH-ほど 良い-M 人間.ABS-も  
 dun            guro,  
 私.ABS    ～ではない  
 「私はあなたが言うほど良い人間でもない」[XM-K, 296]

## 5. 比較以外で「～ぐらい」を表す動詞+ŋan

次の(8), (9)は、ŋanの前に形容詞的分詞形の過去時制形と一般時制形が来ているが、前の節で述べたような比較を行っているわけではなく、動詞+ŋanで程度の説明を行っている。

- (8) Q'almica qwa-ra-b-ʕan bercina-b humer,  
 ペン.ERG 書く-PST.PRT-NH-ぐらい 美しい-NH 顔.ABS  
 「ペンで書いたぐらい美しい顔」[RG-G, 273]
- (9) ras-al qahfiz-a-r-ul-e-b-ʕan zahmata-b  
 髪-PL.ABS 白くなる-CAUS-PL-GNL-PRT-NH-ぐらい 難しい-NH  
 「髪を白くするぐらい難しい」[ASS, 2009, No. 2]

(8), (9)のように、程度の説明を行うために、動詞+ʕanが使われている例はたくさんある。前節で述べた比較していると解釈される動詞+ʕanの用法も程度の説明を行うための動詞+ʕanの用法の一種と考えることも可能である。

## 6. 「～だけ、～かぎり」と訳せる動詞+ʕan

k'w-eze 「～できる」の形容詞的分詞形の過去時制形にʕanが後続した k'w-a p a-AM-ʕanは、日本語に訳すと、「できるだけ、できるかぎり」となり、「できるだけ」と訳すことも可能かもしれないが、変な感じがする。また、AM-oʔ-ize 「望む、欲する」の形容詞的分詞形の過去時制形にʕanが後続したAM-oʔ-a p a-AM-ʕanも、日本語の訳としては、「望むだけ、望むかぎり」がしっくりくる。「できるだけ、できるかぎり」、「望むだけ、望むかぎり」を表すには、k'w-eze 「～できる」、AM-oʔ-ize 「望む、欲する」の形容詞的分詞形の過去時制形が使われることとともに、k'w-eze 「～できる」、AM-oʔ-ize 「望む、欲する」の定形の過去時制形が使われることもある。(10)が形容詞的分詞形の例であり、(11)が定形の例である。

- (10) k'w-ara-b-ʕan xexgo r-at'aʔ-un  
 できる-PST.PRT-NH-かぎり 速く PL-別れる-CV  
 「できるかぎり速く別れて」[MP-K, 112]

- (11) k'w-ana-ʕan                      ʕedeʕ-un,  
 できる-PST-かぎり      急ぐ-PC  
 「できるかぎり急いで」 [SurM-T, 69]

動詞+ -ʕanで「～だけ、～かぎり」と訳した方がしっくりくるのは、k'w-eze「～できる」、AM-ol'ize「望む、欲する」だけではないと思われるが、この意味で-ʕanの前に動詞の定形の過去時制形が使われているのは、私が調べたテキストでは、k'weze「～できる」とAM-ol'ize「好く」の二つの動詞だけである。4節、5節では、はっきりと述べなかったが、4節、5節の意味で動詞+ -ʕanが使われている場合、形容詞的分詞の代わりに定形が使われていることはない。

## 7. 動詞+ -ʕanで「～するほど」を表す表現

Samedov (1996: 191, 2012: 359) は、動詞の定形あるいは形容詞的分詞形の過去時制形+ -ʕanで「AがCするほど、BがDする」の前半部分「AがCするほど」を表すのに使われると述べている。(12)では、-ʕanの前に動詞の定形の過去時制形が来ていて、(13)では、形容詞的分詞形の過去時制形が来ている。

- (12) dun              k'odoʕ-ana-ʕan                      roxel              dahl-ana.  
 私.ABS      大きくなる-PST-ほど      喜び.ABS      少なくなる-PST  
 「私が大きくなるほど、喜びは少なくなった」(Samedov 1996: 191の例)
- (13) ʕadam-az      Xalun                      j-ecc-ara-j-ʕan  
 人-PL.ERG      Khalun.ABS      F-ほめる-PST.PRT-F-ほど  
 ebel-aʕ      hej                      kak-ul-e-j                      j-ik'-ana.  
 母-ERG      彼女.ABS      けなす-GNL-PRT-F      F-いる-PST  
 「人々がKhalunをほめるほど、母は彼女をけなしていた」 [MP-K, 112]

「AがCするほど、BがDする」の「AがCするほど」は、テキストのほとんどの例で「BがDする」の前にあるが、(14)のように、「AがCするほど」が「BがDする」の中に入っている例もある。

- (14) kolxoz-aɫul            halt'i            son            ara-b-ɕan  
 コルホーズ-GEN    仕事.ABS    年.ABS    行く.PST.PRT-NH-ほど  
 lik'ɫ-ul-e-b-daj    b-uk'-ana  
 良くなる-GNL-PRT-NH-Q    NH-いる-PST  
 「コルホーズの仕事は年が過ぎるほど良くなっていたのですか」  
 [SUG, 2007, No. 12]

「AがCするほど、BがDする」のタイプの(12), (13), (14)は、動詞+ $\text{-}\zeta\text{an}$ が副詞的に使われているとみなせるが、AとBが同じ名詞で、不定名詞である場合、日本語の「CするAほどDする」のように、動詞+ $\text{-}\zeta\text{an}$ が名詞を修飾しているとみなせる構造をしている場合がある。ただし、日本語の「ほど」と違って、 $\text{-}\zeta\text{an}$ は名詞の前にある。(15), (16)がその例である。こうした構造についても、文献では言及されていないと思われる。

- (15) K'udija-l            ɕ-ura-l-ɕan    himalaze  
 大きい-PL    育つ-PST.PRT-PL-ほど    子供.PL.DAT  
 c'ik'k'un    he-l            tema-bi    r-oɫ'-ula.  
 多く            その-PL    テーマ.PL.ABS    PL-好く-GNL  
 「大きく育った子供たちほどそのテーマが好きだ」 [XAK, 2010/5/27]

- (16) untabi                    c'ik'k'-ara-w-ʒan                    ċi                    toxtur-asuqe  
 痛み-PL.ABS    増す-PST.PRT-M-ほど    人.ABS    医者-LAT2  
 ine                    kk-ol-e-w-go                    ʒadin.  
 行く.INF    ～しなければならない-GNL-PRT-M-EMF    ように  
 「痛みが増した人ほど医者のところに行かなければならないように」  
 [ASS, 2007, No. 5]

(15), (16)のように動詞+ʒanが名詞を修飾している場合は、動詞は形容詞的分詞形の過去時制形が使われ、定形の過去時制形が使われている例は見つからない。

## 8. 動詞+ʒanで「～している間」を表す表現

形容詞的分詞形の一般時制肯定形+ʒanを使って、「～している間ずっと」という意味を表すことできる (Samedov, 2012: 358)。ただし、後ろに, mex 「時」あるいはzaman/zamana 「時間」の能格形か第一位格形が続く。

- (17) Mun                    halt'-ul-e-w-ʒan                    mex-ał,    dun-gi                    halt'-ila  
 あなた.ABS    働く-PRS-PRT-M-間    時-ERG    私.ABS-も    働く-FUT  
 「あなたが働いている間、私も働く」 (Samedov 2012: 358の例)

存在動詞AM-uk'ine 「いる、ある」の場合は、一般時制形ではなく、現在時制形が使われる。

- (18) Mun hani-w w-ug-e-b-ʕan mex-alda  
 あなた.ABS ここに-M M-いる.PRS-PRT-NH-間 時-LOC1  
 dun taliha-j j-ik'-ana.  
 私.ABS 幸せな-F F-いる-PST  
 「あなたがここにいる間、私は幸せだった」 [MP-K, 128]

存在動詞AM-uk'-ine「いる、ある」の形容詞的分詞形の現在時制形が一般的には使われている中で、私が調べたテキストに1例だけ過去時制形が使われている例がある。次の(19)である。

- (19) limer urhi-b b-uk'-ara-b-ʕan zaman-aʔ  
 子供.ABS 体内に-NH NH-いる-PST.PRT-NH-間 時間-LOC1  
 hef qalijan b-uħ-ul-e-b b-uk'-ara-b-i,  
 彼女.ABS たばこ.ABS NH-吸う-PRS-PRT-NH NH-いる-PST.PRT-NH-こと  
 「子供が胎内にいる間、彼女がたばこを吸っていたこと」  
 [ASS, 2008, No. 6]

(18)も(19)も主節の動詞は過去時制形であるので、(18)のような現在時制形は相対時制として使われていると考えられ、(19)のような過去時制形は絶対時制として使われていると考えられる。ただ、(19)のような文を他の母語話者が容認するのかどうかは調べていない。

形容詞的分詞形と並んで、定形が使われることがある。これは、動詞がAM-uk'-ine「いる、ある」の場合に限られ、現在時制形が使われる。

- (20) Hej            č'ago            j-igo-ʒan        zaman-aʃ  
 彼女.ABS    生きている    F-いる-間    時間-ERG  
 niʃ            taliha-l        r-uk'-ine        heč'o.  
 私達.ABS    幸せな-PL    PL-いる-INF    いない.PRS  
 「彼女が生きている間、私達は幸せではない」 [ShM-K, 48]

肯定と否定では違いが出る。形容詞的分詞形の一般時制否定形は使われないが<sup>8</sup>、形容詞的分詞形の過去時制否定形は使われる。

- (21) niʃeca        Allah        rex-un        t-eč'-e-b-ʒan                    zamana-jaʃ,  
 私達.ERG   Allah.ABS   捨てる-PC   去る-PST.NEG-PRT-NH-間   時間-ERG  
 Allah-as-gi        rex-un        t-ola-ro.  
 Allah-ERG-も   捨てる-PC   去る-GNL-NEG  
 「私達がAllahを捨て去っていない間、Allahも私たちを捨て去らない」  
 [ASS, 2009, No. 8]

動詞が存在動詞AM-uk'-ine「いる、ある」の場合、形容詞的分詞形の現在時制形の否定形も使われる。

- (22) Dun            hani-w        heč'-e-w-ʒan                    mex-aʃ,  
 私.ABS        ここに-M    いない.PRS.NEG-PRT-M-間   時-ERG  
 「私がここにはいない間」 [DGM, 63]

肯定ではAM-uk'-ine「いる、ある」の定形の現在時制形が使われることを上で述べたが、AM-uk'-ine「いる、ある」の定形の現在時制否定形は使われない。

## 9. 「まで」を表す用法

動詞の不定形の肯定形+*-ʕan*で、「～するまで」を表す (Bokarev 1949: 164, Madieva 1981: 141, 他)。

- (23) Roh-ine-ʕan            ʔiž-ič'o            he-b            sordo-jaʔ    Hasan.  
 夜が明ける-INF-まで    眠る-PST.NEG    その-NH    夜-ERG    Hasan.ABS  
 「その夜、夜が明けるまでHasanは眠らなかった」 [ShM-K, 108]

言及している文献は見当たらないが、名詞を修飾している例もある。私が調べたテキストでは、10例程出てくるが、修飾されている名詞は、全ての例で、*zaman*「時間」である。

- (24) Q'aji            q'wat'i-b-e            b-os-ize-gi            ha-b            ara-b  
 荷物.ABS    外へ-NH-LAT    NH-取る-INF-も    この-NH    行く.PST.PRT-NH  
 dekabralde    ššw-eze-ʕan            zaman            ʔ-un            b-uk'-ana.  
 12月.LAT1    達する-INF-まで    時間.ABS    与える-PC    NH-いる-PST  
 「荷物を外に出すのに、この12月になるまでの時間を与えていた」  
 [XAK, 2009/2/6]

時間関係を表す表現において「～まで」を表すのに、動詞以外に*-ʕan*が後続することがある。時間を表す副詞に*-tize*あるいは*-ta*を付加して、その後、*-ʕan*を加える。たとえば、*kida(l)*「いつ」に*-tize-ʕan*, *-ta-ʕan*が付いている*kida(l)-tize-ʕan*, *kida(l)-ta-ʕan*は「いつまで」を意味する。

動詞の不定形+*-ʕan*に戻る。Bokarev (1949: 271) は、動詞の不定形+*-ʕan*は、時間に関する限界点ではなく、程度に関する限界点を表すことがあることを述べている。ただし、そこで挙げられている例は、「満腹になるまで、食べた」を意味するような例などであり、時間に関する限界点を表している

とも解釈できるような例である。次の(25)のような例は、時間ではなく程度を問題にしている動詞の不定形+ -ŋanの使われ方である。この例では、「～まで」ではなく、「～ぐらい」と訳した方が日本語らしい。

- (25) He-b            kağtida            bož-ize-ŋan  
 その-NH    手紙.LOC1    信じる-INF-ぐらい  
 ŋanta-w        či                    ŋamir            w-at-ani  
 愚かな-M    人間.ABS    Amir.ABS    M-見つかる-COND  
 「Amirが、その手紙を信じるぐらい愚かな人間であれば」  
 [SulM-L, 196]

## 10. 名詞等の向格+ -ŋan

Madieva (1981: 141) は、比較の目的以外で、名詞、副詞、後置詞の向格に-ŋanがつくことを述べている。テキストで調べると、名詞ではほとんどないが、副詞、後置詞の向格に-ŋanがついている例がたくさん見つかる。そこで、その意味が問題になるが、Madieva (1981: 141) は述べていない。私の研究も現在進行中であり、物足りなく感じられるとは思いますが、このような使われ方があることだけを記しておく。

## 11. まとめ

本稿では、アバール語の助詞-ŋanがどのような使われ方をするのかについて述べてきた。

最初に、程度を比較する場合の使われ方から見た。-ŋanの前には、名詞や副詞が現れる。名詞が現れる場合、比較される側の名詞と同じ格で現れる。-ŋanの前に動詞が現れることもある。この場合、動詞は、形容詞的分詞形をしている。

-ʒanの前に個数詞が来ると、「10人ぐらい」の「ぐらい」のようにおおよその数を表すことができる。

程度を比較する場合にも、-ʒanの前に個数詞が来ることがある。-ʒanの前に個数詞が来て、その前に比較される名詞や副詞が現れ、「～の～倍ぐらい」を表すことがある。個数詞+ -ʒanの前に動詞が来ている例は見当たらない。

-ʒanの前に動詞がある場合、程度の比較ではなく、「ペンで書いたぐらい美しい顔」のように、程度の説明をしていることが多い。この場合も、動詞は形容詞的分詞形となる。

比較などでは、動詞+ -ʒanは「～ぐらい」と訳されるが、動詞+ -ʒanは、「～だけ、～かぎり」と訳した方がしっくりくる例がある。k'w-eze「～できる」、AM-ol'-ize「望む、欲する」が「できるだけ、できるかぎり」、「望むだけ、望むかぎり」を表す例で、形容詞的分詞形の過去時制形ならびに定形の過去時制形で現れることがある。

「AがCするほど、BがDする」の「AがCするほど」を表すのに動詞+ -ʒanが使われる。動詞は、定形あるいは形容詞的分詞形の過去時制形となる。「CするAほどDする」の「CするAほど」を表すのにも動詞+ -ʒanが使われることがある。この場合、動詞は形容詞的分詞形の過去時制形をしている。

動詞+ -ʒanは後ろにmex「時」あるいはzaman/zamana「時間」の能格形か第一位格形を伴って、「～している間ずっと」という意味を表すことができる。動詞の形は形容詞的分詞形であることが多いが、定形の場合もある。形容詞的分詞形では、動詞が存在動詞AM-uk'-ine「いる、ある」である場合は、現在形の肯定および否定形であり、そのほかの動詞では、一般時制形の肯定形ならびに過去時制形の否定形である。また、定形では、動詞が存在動詞AM-uk'-ine「いる、ある」の現在時制形の肯定形に限定される。

動詞+ -ʒanで時間に関する限界点「～するまで」を表すことができるが、動詞は不定形になる。「その手紙を信じるぐらい愚かな人間」の「～するぐらい」で表されるような程度に関する限界点を表すこともある。

以上が本稿で述べたことであるが、本稿の目的が-ʒanの使われ方の全体像

を示すことであることから、それぞれの節で書き足りないことが多くあるので、今後の研究の成果を加えながら、公表していくつもりである。

## 例文で使ったアバール語の文献とその略号

- [ASS] AS-SALAM(新聞). Makhachkala.  
 [DGM] Ğazaliew. M. Ğ., Daĝistanijazul Ğadatal wa madanijat. Makhachkala: NII P izdatel'stvo, 2002.  
 [DJu-A] Dadaew, Jusup, Ahul goh — dir rek'el buhi. Makhachkala: Jupiter, 1998.  
 [HH1-R] Haźiew, Husen, Ro'ul teh. Makhachkala: Daguchpedgiz, 1992.  
 [MM-G] Muhamadow, Musa, Goro-c'er balelde cebe. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1991.  
 [MP-K] Murtazaliewa, Pat'imat, Kulakasul jas. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1995.  
 [RG-G] Rasulow, Ğarip, Ğadamalgi raĞadalgi. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1996.  
 [ShG-K] Šaxtamanow, Ğumar-Haźi, Q'aral Ğor. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1994.  
 [ShM-K] Šamxalow, Muhamad, Q'isabi wa xarbal. Makhachkala, 2002.  
 [SUG] Suĝrať(新聞). Sogratl.  
 [SulM-L] Sulimanow, Muhamad, Ğabgo q'isa. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1958.  
 [SurM-T] Surxaew, Musalaw, Tusnaqazda GULAGalda. Maxachkala: Jupiter, 1994.  
 [XAK] Haq'iq'at(新聞). Makhachkala.  
 [XM-K] Hamzaew, Muhammad, Khirijal khalifabi. Moscow: Tarikh, 2007.

## 参考文献

- Bokarev, A. A. (1949). *Sintaksis awarskogo jazyka*. Moscow-Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.  
 Madieva, G. I. (1981) *Morfologija awarskogo literaturnogo jazyka*. Makhachkala: Daguchpedgiz.  
 Samedov, D. S. (1996) Slozhnoe predlozhenie v awarskom jazyke v sopostavlenii s russkim. Doktorskaja dissertatsija. Dagestanskij gosudarstvennyj universitet. Makhachkala.  
 Samedov, D. S. (2012) "Slozhnoe predlozhenie" in Alekseev, M.I., et al. (2012) *Sovremennyj awarskij jazyk*. Makhachkala: Aleph. 320-387.  
 Sulejmanova, S. K. (1980) *Imennye slovosochetaniya v awarskom jazyke*. Makhachkala: Daguchpedgiz.